

ひわご学院大学 令和七年度 一般選抜(国語)

(注) 設問で指示をした字数には句読点等も含みます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

演劇は他者を必要とし、「対話」の構造を要請する。

さてしかし、日本社会には、この「対話」という概念が希薄である。いや、先の辞書の記述などを見ると、それがほとんど、なかったと言ってもいいかもしれない。

これは仕方のない側面もある。

一般に、日本社会は、ほぼ等質の価値観や生活習慣を持った者同士の集合体「ムラ社会」を基本として構成され、その中で独自の文化を(a)ツチカつてきたと言われてきた。

これはたとえば、皆で一緒に田植えをし、草刈りをし、稲刈りをしなければ収量がなかなか上がらない稲作文化の宿命と言えるかもしれない。あるいは、極端に人口流動性の少ない社会を作った徳川幕藩体制が、そのような傾向に、さらに(1)「I」をかけたとも言えるだろう。

私はこのような日本社会独特のコミュニケーション文化を(2)「わかりあう文化」「察しあう文化」と呼んできた。第一章で指摘した「温室のようなコミュニケーション」も、このような文化的な背景を前提としている。

一方、ヨーロッパは、異なる宗教や価値観が、陸續きに隣りあわせているために、自分が何を愛し、何を憎み、どんな能力を持つて社会に貢献できるかを、きちんと他者に言葉で説明できなければ無能の(b)烙印を押されるような社会を形成してきた。これを私は、「説明しあう文化」と呼んでいる。

両者は、それぞれが独立した文化体系であるから、どちらが正しいとか、どちらが優れているということはない。

実際、私たちは、この「わかりあう文化」「察しあう文化」の中から、様々な素晴らしい芸術文化を生み出してきた。たとえば、柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺

という句を聞いただけで、多くの人が夕暮れの斑鳩の里の風景を思い浮かべることができる。これは大変な能力だ。

この均質性、社会言語学などというところのハイコンテクストな(相手のコンテクスト、相手が何と言いたいのかを察しやす)社会が、日本をアジアの中でいち早く近代国家へと導いたことは間違いないだろう。我々は、組織だって、一丸となって何かを行うときに、まさに(3)阿吽の呼吸で大きな力を発揮する。

だが一方で、こういった「察しあう」「口には出さない」というコミュニケーションは、世界においては少数派だ。少数派だからダメだと言っているわけではない。少数派の強みもある。たとえば私が暮らす芸術の世界などは、少数派の利点も随分とある(この点は第六章で詳しく述べる)。

あるいは、現代社会のようにキリスト教とイスラム教という一神教同士が正面からぶつかりあっている世界の現状を見ると、「まあ、まあ、そこはお互い察しあつてさ」という仏教的というか、日本的というか、そのような(c)曖昧で慈愛に満ちたコミュニケーションの形が、なんとなく世界平和に貢献できる部分もあるのではないかと感じることも多い。

だが、そうは言っても、やはり文化的に少数派であるという認識は、どうしても必要だ。そうでないと、ビジネスや日常生活の場面では、日本人は、いつまで経っても理解不能な変わり者扱いになってしまう。

そして、否が応でも国際社会を生きなければならぬ日本の子どもたち、若者たちには、察しあう・わかりあう日本文化に対する誇りを失わせないまま、少しずつでも、他者に対して言葉で説明する能力を身につけてあげたいと思う。

だがしかし、(4)「説明する」ということは虚しいことでもある。

柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺

を説明しなければならないのだ。柿を食べていたら偶然鐘が鳴ったのか。鐘が鳴ったから、柿を食いたくなつたのか。法隆寺はなんの象徴か。こんな身も蓋もない説明を、しかし私たちは、他者に向かって繰り返していかなければならない。

TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)に入ったからと言って、第三の開国が(d)ジョウジュするわけではない。本当に私たちが行っていかなければならない精神の開国は、おそらくこの空虚に耐えるという点にある。(5)コミュニケーションのダブルバインドを乗り越えるというのは、この虚しさに耐えるということだ。

「『対話』と『対論』はどう違うのですか?」という質問もよく受ける。

「対論」＝ディベートは、AとBという二つの論理が戦つて、Aが勝てばBはAに従わなければならない。Bは意見を変えねばならな

いが、勝ったAの方は変わらない。

「対話」は、AとBという異なる二つの論理が摺りあわせり、Cという新しい概念を生み出す。AもBも変わる。まずはじめに、いずれにしても、両者ともに変わるのだということを前提にして話を始める。

だが、こういった議論の形にも日本人は少し苦手だ。最初に自分が言ったことから意見が変わると、何か嘘をついていたように感じてしまうのかもしれない。あるいはそこに、敗北感が伴ってしまう。

「対話的精神」とは、異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを（e）潔しとする態度のことである。あるいは、できることなら、異なる価値観を持った人と出会って議論を重ねたことで、自分の考えが変わっていくことに喜びさえも見いだす態度だと言ってもいい。

ヨーロッパで仕事をしていると、些細なことでも、とにかくやたらと議論になる。議論をすること自体が楽しいのだろうとは思えないときも往々にしてある。

三〇分ほどの議論を経て、しかし、たいいて日本人の私（A）の方が計画的だから、その「対話」の結末は、Cというよりは、当初の私の意見に近い「A」のようなものになる。そこで、私が、

「これって結局、最初にオレが言っていたのと、ほとんど変わらないじゃないか」

と言うと、議論の相手方（B）は必ず、

「いや、これは II だ」

と言ってくる。

だが、この三〇分が、彼らにとっては大切なのだ。

とことん話しあい、二人で結論を出すことが、何よりも重要なプロセスなのだ。

幾多の（おそらく私よりも明らかに才能のある）芸術家たちが海外に出て行って、しかし必ずしもその才能を伸ばせないのは、おそらく（6）この対話の時間に耐えられなかったのではないかと私は推測している。様々な舞台芸術の国際協働作業の失敗例を見ていくと、日本の多くの芸術家は、この時間に耐えられず、あきらめるか切れるかしてしまうのだ。日本型のコミュニケーションだけに慣れてしまっていると、海外での対話の時間に耐えきれずに、III「と切れるか、」と切れるか、「どうせ、わからないだろう」とあきらめてしまう。演劇に限らず、音楽、美術など、どのジャンルにおいても海外で成功している芸術家の共通点は、粘り強く相手に説明することをいとわないところにあるように思う。日本では説明しなくてもわかってもらえる事柄を、その虚しさに耐えて説明する能力が要求される。

私はこの能力を、「対話の基礎体力」と呼んでいる。そして、小中学校の先生方には、

「対話の技術は大学や大学院でも身につきますから、どうか子どもたちには、この『対話の基礎体力』をつけてあげてください」とお願いしてきた。

異なる価値観と出くわしたときに、物怖じせず、卑屈にも尊大にもならず、粘り強く共有できる部分を見つけ出していくこと。ただそれは、単に教え込めばいいということではなく、おそらく、そうした対話を繰り返すことで出会える喜びも、伝えていかなければならないだろう。

意見が変わることは恥ずかしいことではない。いや、そこには、新しい発見や出会いの喜びさえある。その小さな喜びの体験を、少しずつ子どもたちに味わわせていく以外に、（7）対話の基礎体力を身につける近道はない。

（平田オリザ『わかりあえないことから』講談社）

（注） 「ダブルバインド」・・・二つの矛盾した要求や情報を受け取ることで、どちらの選択肢を選んでも罪悪感や不安感をおぼえるような心理的ストレスのある状態のこと

問一 傍線部（a）～（e）のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- （a）ツチカつて （b）烙印 （c）曖昧 （d）ジョウジュ （e）潔し

問二 傍線部（1）「【I】」をかけたとは「物事の進行を早めた」という意味です。「【I】」にあてはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

問三 傍線部(2) 「わかりあう文化」「察しあう文化」ゆえに生まれた日本の芸術文化とは何ですか。本文を参考に答えなさい。

問四 傍線部(3) 「阿吽の呼吸」について、次の(一)・(二)の各問いに答えなさい。

- (一) 「阿吽」の読み仮名をひらがなで答えなさい。
- (二) 「阿吽の呼吸」の意味を答えなさい。

問五 傍線部(4) 「『説明する』ということは虚しいこともある」理由を答えなさい。

問六 傍線部(5) 「コミュニケーションのダブルバインド」とはどういうことですか。(注)の「ダブルバインド」の意味を参考に説明しなさい。

問七 Ⅱ・Ⅲに当てはまる言葉を考え、それぞれ十字以内で答えなさい。

問八 傍線部(6) 「この対話の時間に耐えられなかった」とありますが、筆者は具体的にどうすることが大切だと考えていますか。該当する一文を文中より抜き出し、始めの七字で答えなさい。

問九 傍線部(7) 「対話の基礎体力」とはどういうことですか。文中の言葉を使って簡潔に答えなさい。

問十 本文の内容に合致するものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、「対話」と「対論」では、「対話」の方が「勝ち負け」が明らかなので、説明能力が高められる。
 - イ、「対話」の方が、両者とも変われるという意味において、優れた議論の方法と言える。
 - ウ、日本がいち早く近代化を果たした要因の中には、相手が何を言いたいのかを察することができるところがある。
 - エ、日本の演劇が海外で評価されなかった要因の一つに、芸術家の表現力の問題がある。
- オ、今後の日本の子どもたちには、相手の立場を理解する能力と、対話に耐える力が必要である。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*原文にあるフリガナは削除しています。

ほぼ二年ごとに赴任地のかわる父に伴い、操は季節はずれの転居をした。晩秋の肌寒い頃である。家の前を通りかかる生徒にまじって新たな学校へ向かった。億劫なのと意気地のないので自分から口を利くことができず、同じ紺色でも操の着ているのは(a) ビミヨウにちがう制服の群をやり過した。

操は終始、顔をうつむけて歩いていった。聞こえる声はすべてよそよそしく思われ、路の端へ端へと躰が傾く。枯れ葉の吹き溜まりでときおり靴底がすべった。

教員室での手続きはこの学校も同じで、揃えてある書類を提出するだけでよかった。担任教師にもなわけて教室へ向かうころに、ようやく覚悟がさだまる。当面の目標は窮屈な初対面の儀式を、ともかくも済ませてしまうことだ。あとは成り行きまかせでいい。操は廊下や階段の貼り紙、かすかに沁みた墨汁の匂いなどに気づく余裕がでた。

飾り気のない校舎だが、手入れはよく行き届いている。磨かれた窓から、操を励ますように澄明な碧い天が見えた。下駄箱や廊下に運動用具がならんでいないのが、(一) ひとまず操を安堵させた。度重なる転校で、早々と校風を見抜く眼力だけは(b) 長けていた。学校によつては、ボールや体操器具がこれみよがしに廊下へならび、ひとりひとりがいかに熱心にそれと取り組んでいるかを誇らしげにあらわした。操は小柄で非力なのを気にしている。生徒をひとり洩らさず運動に駆り立てる一致団結の精神には、もっとも馴染めないのだ。

教室への第一歩は、これまでに経験した緊張や気詰まりと似たり寄ったりだった。少しだけどよめき、ひそひそ声に変わる。(二) 操は力の抜けた声で、面白みのない挨拶をし、指定された席へおとなしく腰かけた。

隣あう生徒の好奇心を満たすだけの応答を小声でかわした後は、不慣れた教科書へ目を落とした。字面を目で追っても、頭へ入ってこない。その後、生徒たちはざわつくこともなく教室は平静に戻った。操は、またしても取るに足らない生徒だと評されたことを察した。

操は級友たちの顔や名前を覚えるよりも、天井に打ちこまれた鋸の教や、床の釘穴の教を知るほうが先になるだろうと思った。ほうつておいて呉ればまだいい。不得手な球技に無理やり誘われやしないかと、気が気でない。巧くボールを扱えず、もたもたしている我が身の姿を容易に想像できた。

そんな具合だったので、次の休憩時間に声をかけられたときは驚いた。

「教科書は、前と同じだったかい、」

その生徒は気さくに訊ねた後で、つけ足すように自己紹介をした。樺島至剛と名乗った。こんなにもさりげなく、好奇心や(3)物見高さもなしに声をかけられたのははじめてだった。

「白樺の樺に島と書いて、かわしまと読むんだ。至剛っていうのは発音しにくいだろう。さっさと忘れてくれいいよ。一応説明しておくと、至るに剛力の剛と書いてみちたかと読ませるのさ。至大至剛っていう孟子のことばだよ。どんなことにも屈せず、かぎりなく強いっていう意味。ぼくが生まれたときはまだ曾祖父が健在で、こんな大仰な名前になった。」

苦笑しながら云う。みちたかというその響きが、見るからに利発で端正な少年の人となりといかに融け合っていたか、操はことばにあらわせない性分をはがゆく思った。樺島は、主な教科の進み具合や担当の教師の気質やあしらい方などを、姿に違わず端的に説いた。それがどれほど(4)マトをイタ解析であるかは、いつしかまわりに集まっていたほかの生徒の反応で察することができた。

わずか十分の休憩のあいだに、操は(5)この学級の心意気が、樺島という端正で気持ちのよい生徒に収斂しているさまを目の当たりにした。彼は、十四歳という年齢の持ち得るかぎりの機知に富み、明朗で麗しく、それらは少年の人格に最大限生かされていた。至剛という名前のおよぼす印象は、すらりとした躰つきではなく、おおらかで惑いのない気立てに尽きる。

樺島は、操が内気で小声であるということを重ねに感じないよう、それとなく配慮してくれた。月並みに「ほら、もっと大きな声をだしてご覧」などと励ましはしない。皆と活発にまじわるのを(c)無理強いすることもない。傍にいて始終かばってくれるというやり方ではなく、操が精一杯努力した後で、どうしても手助けがほしいと思うときに、必ず手を差し伸べるというふうだった。

「(6)静かなのはいいことだよ。声をはりあげなくたっていい。耳を澄ませば、いくらだって聞こえるんだから。」

樺島のおかげで、操はくりかえした転校の中ではじめて、情けない思いをせずに学校生活を送ることができた。

二学期は思いのほか早く過ぎ、冬休みを迎えた。例年祖父母の家で歳を超す操は、めずらしく休暇明けを待ち侘びながら正月を過ごした。初詣で、家族以外の者の幸福や健康を(d)イノったのも、かつてないことだった。操の生活にこれまで介入したことのない、友のありがたみを、しみじみとかみしめた休暇は、あつという間に過ぎた。

始業式は、操の晴れ晴れとした気分を差すような小雨だった。気ぜわしく教室へ飛び込んだ操は、樺島の姿がないばかりでなく、彼の机にも登校した形跡のないことをすぐに認めた。ふだんは、操が来るころには学級の誰かと談笑する樺島の声が聞こえる。笑い声も話しぶりも、これから始まる(7)一日の確かさをあらためて悟らせてくれるものだった。

「樺島君は、」

操は、目こる樺島と親しくしている少年に訊いた。操のほうから声をかけるのは、はじめてだった。

「……うん、彼ね、とうぶん来られないと思う。」

少し口ごもった。

「どうして、」

「具合が悪いんだ。年末に入院して、今は家に戻っているんだけど、まだ静養が必要らしい。」

「病気の、」

相手の少年は、苦心して笑みを浮かべた。それから自身を納得させるように何度かうなずいた。

「心配ない。大丈夫だよ。夏の休暇明けのときもそうだった。急な暑さや寒さが報えるんだ。慣れてくれば平気だって、いつも云つてる。」

「前から悪いの、」

操は不意を打たれて、ことばが(e)虚ろになった。樺島を頼るばかりだった休暇前の自分が、苦々しく思い起こされる。朽ち葉を焚く匂いが路地に充ち、林野がすっかり冬枯れてしまうまでの数カ月あいだ、操はいつになく呑気に暮らした。今になって、樺島の背丈のわりに細くすんなりのびた手脚やくすみのない肌の色が、彼の病を暗示していたかもしれないと思う。だが、愉しさにかまけて

気づく暇がなかった。

「何人かで、見舞いに行こうって話してたんだけど、きみも来るかい、」

操はすぐさま応じ、放課後に連れだつて出かけた。傘に落ちる雨音は、ならんで歩いている数人の少年たちをせかした。途中、この訪問に操をくわえてくれた少年の家へ寄り、彼の母が用意した見舞いの包みを受けとった。

操は、少年の家の表札を見て、彼の唐津という名字を思いだした。樺島は、優と呼んでいる。この日、操は混乱したせいで、たつた今まで唐津の名字を思いだせないでいたのだ。親しく口を利いたのもきょうが最初である。これまでは、いつも樺島が操と級友たちのあいだを取り持っていた。

「樺島は、あれで甘党なんだよ。」

唐津は包みの重さを確かめながら、たぶんチョコレートのスフレだろうと云つて、舗の包装を見せた。知られた舗らしく、操のほかは皆でうなずいた。

まもなくたどりついた樺島の家は、(8) 賢い少年を育むにはうってつけの、閑静なたたずまいをしていた。玄関の軒燈を取りかこむように木彫の飾りがあつて、そこにはふつくらとした鳩が二羽ならんでいた。

(長野まゆみ『鳩の栖』集英社)

問一 傍線部(a)・(e)のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- (a) ビミョウ (b) 長けて (c) 無理強い (d) イノった (e) 虚ろ

問二 傍線部(1)「ひとまず安堵させた」理由を答えなさい。

問三 傍線部(2)「操は力の抜けた声で、面白みのない挨拶をし」た理由を、文中の言葉を使って答えなさい。

問四 傍線部(3)「物見高さ」の意味として最も近いものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア、驕った様子 イ、客観的な様子 ウ、珍しがる様子 エ、面倒な様子 オ、力強い様子

問五 傍線部(4)「マトをイタ」について、次の(一)・(二)の各問いに答えなさい。

- (一) カタカナを漢字にしない。
(二) 「マトをイタ」の意味を答えなさい。

問六 傍線部(5)「この学級の心意気が、樺島という端正で気持ちのよい生徒に収斂しているさま」とは、学級がどのような様子であると表現していますか。解答欄に合うように、文中より十字で抜き出さない。

問七 傍線部(6)「静かなのはいいことだよ」と言つた理由は何ですか。この文章より前の、文中の言葉を使って答えなさい。

問八 傍線部(7)「一日の確かさ」とは、どんな状況を表現したものかを説明しなさい。

問九 傍線部(8)「賢い少年」について、次の(一)・(二)の各問いに答えなさい。

- (一) 「賢い少年」とは具体的にどのような点を指していますか。文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。
(二) この少年の病状が思わしくなくことが読み取れる表現の一文を文中より抜き出し、始めの七字で答えなさい。

正答例 & 解説

2025 年度 一般選抜【国語】

正答例

一	問一	(a) 培 (b) らくいん (c) あいまい (d) 成就 (e) いさぎよ
	問二	拍車
	問三	俳句
	問四	一 あうん 二 二人以上が何かを行う場合に、気が合っていること。
	問五	わかりきった身もふたもない説明を繰り返さなければならないから。
	問六	日本では「察しあう」「口に出さない」コミュニケーションが大切である一方、国際社会ではわかって当然なことも説明しなければならないこと。
	問七	Ⅱ 二人で出した結論 Ⅲ 何でわからないんだ
	問八	異なる価値観と
	問九	日本では説明しなくてもわかってもらえる事柄を、その虚しさに耐えながら説明する力
	問十	ウ

二	問一	(a) 微妙 (b) た (c) むりじ (d) 祈 (e) うつ
	問二	小柄で非力な操にとって、今回の学校が無理やり運動に駆り立てるような校風でないように感じたから。
	問三	初めての儀式をとにかくも済ませたかったから。
	問四	ウ
	問五	一 的／射 二 目標や要点を的確に捉えること
	問六	おおらかで惑いのない
	問七	操が内気で小声であることに重荷を感じないようにするため。
	問八	操が安心して学校生活を送ることができる状況
	問九	一 機知に富み、明朗で麗しい点 二 相手の少年は、

大問	問	配点
1	1	各 2 点 × 5
	2	3 点
	3	3 点
	4	各 3 点 × 2
	5	4 点
	6	4 点
	7	各 4 点 × 2
	8	4 点
	9	4 点
	10	4 点
2	1	各 2 点 × 5
	2	4 点
	3	4 点
	4	4 点
	5	各 3 点 × 2
	6	5 点
	7	4 点
	8	5 点
	9	各 4 点 × 2
	合計 100 点	



大学受験のエキスパート！
が詳しく解説！

攻略ポイント

全体で大問が2題で、大問一は評論で設問数が10問、大問二は小説で設問数が9問。設問内容は、漢字問題、空欄補充問題、内容説明の問題、語句の意味を答える問題、抜き出し問題、内容合致問題、理由説明の問題、語句の意味を選ぶ問題である。全体的な難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものであり、難問レベルのものはない。漢字の読み・書き、抜き出し、選択問題を含む記述式で出題されている。文章は比較的読み取りやすい内容であり、大問一の評論は3700字程度、大問二の小説は3000字程度で、ともに標準的な文量である。設問については、正確に文章内容を読み取る力を問うものである。学校で学習する内容を理解して、丁寧に文章を読み、設問に対して正確に解くことを身につけよう。そのうえで、練習問題やびわこ学院大学の過去問題を解いてしっかりと準備しよう。過去問題は必ず時間をはかり、2回以上解いて、読むスピードや解くスピードといった時間配分を確認しておこう。

大問一

問五は理由説明の問題である。「『説明する』ということ」が「虚しいことでもある」と判断できる理由を説明する問題。傍線部の主部にあたる「『説明する』ということ」に力がかっこが付けられているので、その主部の説明に着目してみよう。そうすれば、傍線部直後にある「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」という句について「こんな身も蓋もない説明を、しかし私たちは、他者に向かって繰り返していかなければならない」という解答根拠を特定できる。〈解答根拠を明示する〉ということを意識して、答案作成をおこなおう。

問八は傍線部について筆者が大切だと考える具体的内容を抜き出す問題である。傍線部「この対話の時間」という指示内容として、傍線部直前の「芸術家たちが海外に出て行って、しかし必ずしもその才能を伸ばせない」ということを確認しよう。それについて説明している箇所が、傍線部より9行後「異なる価値観に出くわしたとき」と表現でまとめられている。その段落を確認すれば、筆者が伝えていかなければならないと考える内容を見つけることができる。

- ◎この問いを例題にして学ぼう！
- ① 傍線部を含む一文の構文をチェックする。

② 指示語は必ず指摘する。

③ 指摘した指示内容を手がかりにして、解答根拠を特定する。

大問二

問三は理由説明の問題である。「操」が「力の抜けた声で、面白みのない挨拶をし」たと判断できる理由を説明する問題。解答根拠に基づいて考えなければ、何となく解答してしまうタイプである。本文7行目に「当面の目標は窮屈な初対面の儀式を、ともかくも済ませてしまうことだ」という主人公「操」の心情を特定できる。

問九は内容説明の問題である。傍線部「賢い少年」とは「樺島」のことであり、その人物像については傍線部(5)の直後で描かれている。「賢い」という語句の意味をふまえて、「機知に富み、明朗で麗しく」という箇所を用いて解答作成をおこなおう。